

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第40号

News Letter

2021年11月30日発行



写真:ラオス 村の母親たちにグループインタビューをする現地職員

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health



ISAPH初の オンラインスタディツアーの試み ～聖マリア学院大学の学生とともに～

ISAPHラオス 安東 久雄

ISAPHラオス事務所は、将来の国際保健人材を育てたいという想いで、毎年全国の大学生にスタディツアーの機会を提供しています。私自身、学生の頃に東南アジアや南アフリカ地域のフィールドスタディを経験したことが原動力となり、継続して国際保健への関心を持ち続け、キャリアを積み重ね、ついにはISAPHの職員としてラオスの現場で働くことができます。コロナ禍であったとしても、国際保健に関心を持つ学生が、現場を知り、現地の人から学び、問題解決のために一緒に考える学習の場が得られるようにしたいと考えています。

今年は9月17日から10月1日にかけて、聖マリア学院大学の学生13名と引率者の秦野先生がオンラインスタディツアーに参加してくれました。例年であれば、現場で五感を使ってラオスを体感してもらうことができましたが、今年はコロナ禍によりオンラインでの実施となり、「見ること・聴くこと」からしか学習の機会を提供できません。どうしたら現場の臨場感とISAPHの活動の楽しさをリアルに学生に伝えることができるのか、学生の満足度を高めるにはどのような学習内容を準備すべきかととても悩みました。秦野先生やISAPH内で話し合いを重ね、LIVE中継と事前に用意した動画、グループディスカッションを組み合わせ、ラオスの人々の暮らしと健康課題、ISAPHの活動を系統的に理解してもらえるように実習を行いました。病院見学や市内観光、家庭訪問の際には学生から現地のラオス人に直接インタビューする機会を設け、学生が事前学習で抱いた問題意識を質問に変えられるように導きました。学生が質問の回答を得て終わりではなく、何を考えたのか、新たにどんな疑問を抱いたのかを掘り下げて授業を展開することを心がけまし

た。ISAPHが目指すのは「住民中心の健康作り」です。医療従事者が主導する保健医療サービスの強化というよりは、地域住民が主体となって健康について学び、行動を変えていけるよう寄り添った支援を目指しています。臨床看護を中心に学んできた看護学生に、このような公衆衛生学的な視点を理解してもらえるようにディスカッションを誘導しました。

オンラインであったとしても、「ラオスの保健医療システムや農村部の暮らしを知る」という意味では、十分な学習機会を提供することができたと実感しています。オンラインであれば、日本から安全に海外のことを知ることができるというメリットがあることもわかりました。参加した学生からは、ラオスの酷暑の影響を受けずに、自分のペースで考え、みんなでディスカッションする時間を作れたことで、教科書だけでは学べないことを数多く経験できたという意見をいただくことができました。さらに嬉しいことには、「予防できる病気から自らを守っていけるように、人と地域を育てる」というISAPHのヴィジョンに共感して、「来年、ラオスに行ってみよう」という感想をたくさん聞くことができました。農村部での脆弱なインターネット環境という課題は残りますが、コロナ禍であったとしても、ISAPHの活動をより多くの方に理解してもらえるように、引き続きスタディツアーを受け入れていきたいと思えます。



住民中心の健康作り・地域作りを学ぶ



サイブートン郡の一般家庭を訪問



マホソット病院見学後の意見交換会

パイロット農家の 次世代成虫養殖へのチャレンジ！

ISAPHラオス 石塚 貴章

一般社団法人日本国際協力システムの「JICS NGO 支援事業」による助成金を受けて2021年3月から2022年4年の13カ月間、パイロット農家を対象に、自立かつ継続してゾウムシを養殖できる「モデル」へと成長できるように支援しています。

これまでパイロット農家では、譲渡された成虫を飼育し、産卵→孵化→幼虫（食用）まで育てる技術を身に付けてきました。この成虫は、ISAPHの昆虫種苗ラボで生産していましたが、これからゾウムシ養殖を一般の世帯へ広げていくためには、生産規模を拡大しなければなりません。そのため、パイロット農家が成虫を生産（繁殖）する技術を備えることで、他の世帯へ養殖を広げる基盤が整うことになります。

連続して成虫を生産する、すなわち昆虫を繁殖し続けることは、決して容易ではありません。1世代、卵から幼虫まで育てることは比較的簡単ですが、次世代を継続して育てるとなると、虫の栄養状態にも留意する必要があります。エサや環境など気を配らなければなら



パイロット農家の成虫生産トレーニングを開始

ないことは多岐にわたります。たとえば、幼体期のエサ不足によって栄養不足を招いた場合、成虫にならなかったり、産卵せずに途絶えてしまったりします。このワンステップ高い養殖技術を学んでもらうために、本事業ではパイロット農家のやる気・興味に意識をしてコミュニケーションをしています。来年には、パイロット農家のスキルアップした姿をお伝えできると思いますので是非ご期待ください！

サイブートン郡 母子保健プロジェクトの 3カ月定期活動会議の実施について

ISAPHラオス 石塚 貴章

カムアン県では8月下旬から、新型コロナウイルス感染症の新規感染者増加に伴い、往来封鎖（ロックダウン）の措置がなされました。オフィスでの業務は禁止となり、ISAPHラオス事務所スタッフは在宅ワークに切り替えています。インターネット環境が整っているラオスでは、活動地への訪問ができないことを除けば、在宅ワークであってもカムアン県保健局やサイブートン郡保健局とオンラインで連絡を取り合って活動を進めることができます。

往来封鎖前の2021年7月28日に、サイブートン郡母子保健プロジェクトの3カ月定期活動会議を実施しました。私たちのカウンターパートであるカムアン県保健局とともに60名以上のプロジェクト関係者（サイブートン郡副郡長、13村長及び女性同盟等）を招聘し、プロジェクトの進捗報告と今後の実施計画の説

明をするとともに、住民が母子保健サービスを受療しない習慣・できない要因について意見交換をしました。普段はISAPHと郡保健局がそれぞれの村ごとに活動しているため、村の住民が他村の住民と顔を合わせることはありません。今回の会議では、他の村でも同じような悩み・問題を抱えていることを住民の口から互いに共有できた大切な機会となりました。この意見交換の成果を、次回のMOU 1年活動報告会でお伝えできたらと思います！



異なる立場の関係者が率直に意見を交わしました



プロジェクトの効果を アフリカ農村部で科学的に検証する

ISAPH マラウイ 山本 作真

2018年5月にスタートしたJICA（国際協力機構）草の根技術協力事業「母と子の『最初の1000日』に配慮したコミュニティー栄養改善プロジェクト」も、2021年12月の終了時期が見えてきました。プロジェクトの幕引きを前に、介入効果を測定する終了時調査を2021年8月～9月に実施しました。

3年あまりにわたってプロジェクトを実施した結果、地域にどのような変化があったのか客観的に知り、表現できなければいけません。ISAPHの活動を通じて、目の前にいる子どもたちの栄養状況が良くなったと、どうやって評価したらよいのでしょうか。

調査の内容は、2017年8月に実施したものと基本的に同じ内容で構成され、3年前と計測値や対象者の回答がどのように変化しているかを比較することで、評価します。前回と同じ8月に実施するのは、季節を合わせて栽培・流通している旬の作物の条件を揃えるためです。

今回のプロジェクトは、最終的には地域内全体で子どもたちの摂食状況の改善を通じて発育状況が向上するのが目標です。しかし、対象者を絞って調査するとはいえ、対象地域に住む数百人が食べている食事を計量して成分を調べ、栄養量を計算するわけにはいきません。そこで、簡易的な指標を用いて評価を行うこととなります。いろいろな食品を食べていて、食材が多様性に富んでいるほど子どもの発育状況も良いといわれています。そのため、過去24時間に対象世帯の母子が何を食べたか聞き取り調査を行い、食べていた全ての食材を分類しスコア化すると、栄養の状態が概ね分かります。



聞き取り調査の様子。右奥は監修のMzuzu大学Mhango先生

ところで、マラウイは公用語が英語で、国語が主要部族に由来するチェワ語という言葉です。しかし、対象地域のマラウイ北部ムジンバ県で主に使われているのはトゥンブカ語という別の言葉。聞き取り調査も当然、村人が使っているトゥンブカ語で行います。トゥンブカ語には体系的な教科書もなく、科学的な裏付けのある調査を実施するには、現地語を使える調査員だけでなく、その言葉を話す社会調査の専門家による監督が必要になります。

そこで、マラウイ北部にあるMzuzu大学看護学部から、公衆衛生の調査に精通するLucky Mhango先生とGriffin Chilambo先生の参加協力を得ました。また、聖マリア病院からは小児科・疫学の専門家として国際事業部の足立基医師が参加。こうして、現地の調査員を指導・監督する体制を組織しました。

調査では食の多様性の他にも、子どもたちの身長体重の測定、これまでISAPHが指導してきた保健や栄養に対する住民の理解度や実践状況、ISAPHが導入した作物をどれだけ家庭が栽培しているか、などの多岐にわたる項目について聞き取りを行いました。

調査を通じて得られたデータは集計し、現在も解析を進めています。3年前の同時期と比べて、動物性タンパク質などを含む、かつては食べられていなかった食材の消費が伸びて食の多様性が向上しているようです。また、子どもたちの発育状況も3年前の同じ地域と比べて改善されているように見受けられます。12月のプロジェクト終了に向けて、最終的な結果を報告としてまとめている最中ですが、近く良い結果が発表できるのではないかと思います。



新生児の身長を測定する足立基医師

マラウイ版 レシピ動画の撮影を行いました

ISAPHマラウイ 浜中 咲子

ISAPHマラウイ事務所の活動の一つに、ISAPHが紹介した新規導入の作物や、村にあるのに料理であまり使用されていない食材（牛乳など）の調理方法を紹介するための調理実習があります。現在は、調理実習の前に現地職員がレシピ動画を村人たちに見せ、調理手順などを教えています。

新型コロナウイルス感染症の拡大による緊急退避前は、新しいレシピを紹介するために、日本人職員が現地職員に対して直接、調理実習を実施していました。しかし、遠隔で活動をするようになり、現地職員に調理方法を教えるために、日本で撮影したレシピ動画を用いて新規レシピの紹介を行っていました。作成当初は現地職員向けに作っていましたが、活動の中で職員たちがレシピ動画を村人たちに見せるようになりました。調理実習前に料理の完成版を見ることができる・教材として繰り返し見ることができるなどの利点があったからです。しかし、日本で撮影を行っていたため、調理環境などは村と大きく異なっていました。そのため、マラウイへ赴任後は、活動地であるマニャムラで撮影したレシピ動画を作成したいと思っていました。

実際の撮影は村に住む現地職員の家で行いました。出演者にはスタッフの他にスタッフの家族・親族、近隣住民などに協力をしてもらいました。

今回のマラウイ版のレシピ動画では、日本版と異なるところがいくつかあります。

1つ目は、日本版は調理風景のみですが、マラウイ版では調理をしているISAPH現地職員やその家族の自己紹介を入れました。娯楽の少ない環境で、レシピ動画がただ料理の作り方を知ることのできるものでは

なく、娯楽の一つとして少しでも楽しく見られるものにしたかったからです。

2つ目は、日本版ではほぼ英語字幕のみでしたが、全ての動画に現地語字幕・現地語ナレーションをつける予定です。村で日本版レシピ動画を視聴しているところを見た際に、一つのタブレットに対して10人以上の村人たちが集まり動画を見ていたため、字幕だけではなく音声でも調理方法を紹介した方が伝わりやすいのではないかと思います。今回全ての動画に現地語ナレーションをつけることにしました。

3つ目は、試食シーンを撮影したことです。日本版では、現地の人実際に食べている風景を撮影することができず、試食シーンを入れていませんでした。レシピを選ぶ際には、実際に美味しそうに食べている風景があった方がいいと思います。今回はこのシーンの撮影を行いました。この部分で、現地職員の家族や近隣住民に参加をしてもらっています。

最後に、調理環境です。実際のマラウイの環境に近づけるために今回の撮影を行いました。撮影してみると大きく異なりました。日本版では、食材を切るシーンのほとんどでまな板を使用していましたが、マラウイでは基本的にまな板を使わないため、マラウイ版では使用しないで撮影をしています。また、食材を加熱する際にも、マラウイ版では炭や木材を使うなど農村部の環境に合わせた内容で撮影を行いました。

現在、完成に向けて編集作業をしています。最終的にはオンラインで視聴できるような形にしたいと考えていますので、日本に住む方々にもマラウイ版のレシピ動画を視聴していただければと思います。



現地職員の自宅で試食シーンを撮影



日本とは大きく異なるマラウイ農村部の調理環境

グローバルフェスタ JAPAN 2021 へ参加させていただきました

ISAPH事務局 村上 麻友子

2021年10月9日・10日の2日間、有楽町にある東京国際フォーラムにて、『グローバルフェスタJAPAN 2021』が約2年ぶりに開催され、私たちISAPHも会場にて出展させていただきました。

イベントは現地出展とオンラインのハイブリット形式で行われ、会場では来場者数の制限と感染症対策が重点的に行われておりましたが、2日間の全体来場者と視聴数は10,357人となったそうです。国際協力やSDGsに興味関心を持っている方の来場が多く、特に子どもたちの学ぶ機会として訪れている家族連れや、研究のために来場している大学生が多く、私たちも充実した2日間を過ごすことができました。

この出展では、NGO福岡ネットワーク（FUNN）様よりいただいた助成金を活用し、私たちの活動地であるラオス・マラウイの農村部の住民が日常的に食べている食事を「フードモデル」として展示を行いました。レストラン等で見かける食品サンプルです。私たちがラオスとマラウイで行っている母子保健事業や栄養改善事業、食用昆虫養殖事業について理解し「実感」してもらうため、現地で実際に食べられているものを作成しました。マラウイの「シマ（主食）＋少量のおかず」、ラオスの「ラープ（ひき肉のサラダ）」「カオニャオ（主食のもち米）」「干し肉」、そして「コオロギとコブミカンの葉の炒め物」の5品のフードモデルを展示しました。双方の国に共通している「栄養の偏りがあること」を実感してもらうことが目的です。非常に精巧に作られており、本物と遜色ないほどのものが出来上がりました。

中でも注目を得たのは、その見た目のインパクトからか、「コオロギとコブミカンの炒め物」でした。意外にも「虫を食べたことがある」という経験を持つ方は多く、若い世代や子どもたちは嫌悪感なく受け入れていることが印象的でした。日本での昆虫食は「貧困

食」や「ゲテモノ」といったイメージが強いかと思いますが、ラオスでは市場で当たり前売られており、おいしく食べる方法も知っています。その文化に目を付け、生計向上と栄養改善の打開策として住民に寄り添った支援を行っているISAPHの活動に、「とても面白い、頑張ってください！」とご寄付をいただくことや、資料を持ち帰ってくださる方が多くみられ、とても励まされました。また、「マラウイ」という国を知らない方も多く、主食であるシマを大量に食べ、おかずは少しで栄養状態に偏りがあることを説明すると、「貧困だから食べられないというわけではないんだ」という新しい発見をされている方もいらっしゃいました。ISAPHがマラウイで行っている農業指導とレシピの紹介もとても興味深く聞いていただくことができ、これまでにISAPHが行ってきたこと、これからのISAPHを今までリーチできていなかった方へ届けることができたイベントであったと思います。

今回使用したフードモデルは、今後の対面イベントや学校での出張講義などでも活用する予定です。実際に目にすることや触ることが難しい今、フードモデルを通して栄養問題や健康に関する「実感」を得られる機会をご提供できればと思います。

ISAPHが行っている活動は「物を支援する」活動ではなく、「明日、誰かの命がなくなる」といったセンセーショナルな内容のものでもありません。しかし、この活動によって救われる命や守られる健康があること、活動によって住民たちや子どもたちの笑顔が守られること、住民たちが自立した生活ができるようになることを、今後も多くの方に知っていただきたいと思っています。主催者の皆様をはじめ、イベントに携わっていただいた方々、ご来場いただきました皆様、そして出展に協力してくれたISAPHのメンバーにこの場を借りて御礼を申し上げます。



ISAPHラオスの元インターンの百合澤さんも遊びに来てくれました



展示したフードモデル

もっと身近に国際協力を ~はじめてのアニバーサリー企画を通じて~

ISAPH事務局 佐藤 優

私が国際協力を自分の仕事にしたいと決意したのは、大学生の頃でした。それから地域保健の専門性を身に着けるために地方自治体で行政保健師として経験を蓄積し、いざ海外に飛び出すことを周りに伝えると、親族や友人から「すごいね」とか「真似できない」という言葉をかけられたことを覚えています。確かに私は少し独特な性格かもしれませんが（笑）、きっと多くの方が、日本国内や世界のどこかで支援を望んでいる人の力になりたいと思っているものの、その一歩が、とても遠く感じてしまうのかもしれません。

そのようなことから15年以上が経ち、ISAPHの事業を担うようになりました。これまでに国際協力に関心を持つたくさんの方々とお会いし、活動へのご支援をいただくことができるようになりました。しかし、今、国内に向けた情報発信の本質は、私たちの活動を知って支援してもらうことではないのかもしれない、ということを感じています。「何かやってみたい」と思っている方に“様々な形で国際協力に参加する機会を提供すること”それが私たちの一つの使命なのではないかと考えるようになりました。開発途上国の人々と共に活動を創る魅力をお伝えし、身近な情報として存在することが大切なのだと思います。

そのような考えがあり、これまでは主に支援をお願いするための情報公開を意識していましたが、今年7月、ISAPHの設立月に合わせた記念企画として、誰でも参加できるISAPH17周年アニバーサリー企画を開催させていただきました。コロナ禍ではありましたが、すべての催し物はオンラインとせざるを得ませんでした。多くの方に関心を寄せていただき、ISAPHを知る・何か行動を起こすきっかけになったのではないかと感じています。

この企画の中で特に印象に残っているのが、「31日応援リレーメッセージ」です。17周年に合わせてISAPHへの応援を呼び掛けたところ、これまでのあゆみを振り返るように、たくさんの方からメッセージ



をいただくことができました。17年間、ISAPHは皆様の助けを借りながら支えられてきましたが、その年月は決して短いものではありません。時には職員、時にはインターンとして現地で共に汗を流し、日本国内からボランティアとして協力いただき、寄付として活動を応援いただくこともありました。とすると、現地の保健課題ばかりに目が行ってしまうのですが、立ち止まり、となりや後ろを振り返ると、これまで様々な形で共に活動をした支援者の顔がありました。当たり前すぎて忘れてしまいそうになりますが、皆さんはISAPHを支援しているだけでなく、ISAPHと“一緒に”ラオスやマラウイの国際協力を携わっていたのだと実感しました。

もちろん、私たちが努力を続けなければ、そのような人々が増えることはありません。これからは「持続可能な開発目標:SDGs」の時代。ISAPHの活動に触れ、関わることで、自分を表現することができる、そんな方との出会いを作っていくためにも、多くの人に開かれた機会をこれからも提供し続けていきたいと思えます。皆さんも私たちと一緒に活動してみませんか？

最近のできごと

2021年6月～9月

- 6月15日 【ラオス】
石塚貴章・安東久雄がラオスで活動開始

- 6月23日～25日 【ラオス】
食用昆虫養殖パイロット農家フォロー：
キャッサバ栽培状況モニタリング

- 7月 ISAPH17周年アニバーサリー企画を実施

- 7月4日～9日 【ラオス】
母親の分娩場所決定に関するインタビュー
調査を実施

- 7月14日 【マラウイ】
山本作真、浜中咲子をマラウイに派遣

- 7月26日 【ラオス】 佐伯専門家がラオスで活動開始

- 7月28日 【ラオス】 3カ月定期活動会議を開催

- 7月29日 【マラウイ】
ムジンバ県保健局長に新たに就任した
Dr. Ted Bandaweと会談

- 7月29日・30日 【ラオス】
食用昆虫養殖パイロット農家フォロー：
昆虫養殖状況モニタリング

- 【ラオス】
村のリボルビングファンド支援：
会計業務PC操作トレーニング

- 8月4日～22日 【マラウイ】
聖マリア病院国際事業部の足立基氏を
マラウイに派遣

- 8月10日～9月24日 【マラウイ】
JICA草の根技術協力事業
「母と子の『最初の1000日』に配慮した
コミュニティ栄養改善プロジェクト」の
終了時調査を実施

- 9月11日・12日 第29回日本健康教育学会学術大会に参加

- 9月17日～10月1日 【ラオス】
聖マリア学院大学のオンラインスタディツアー
を受け入れ



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

法人・一般どちらでも「アイサップサロン」に参加できます。入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

特定非営利活動法人ISAPH

【福岡事務所】

〒813-0034
福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165
E-mail jimukyoku@isaph.jp
URL <https://isaph.jp/>

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 医師
理事	渡部 和男	東京理科大学 特命教授
理事	杉下 智彦	東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座 教授
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPH ニュースレター 第40号 編集スタッフ】

佐藤 優 / 石原 潤子

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設
(一般病院2〈3rdG:Ver.1.1〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病(後)児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。